
ヒルテンリートの鐘が鳴る

鈴一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒルテンリートの鐘が鳴る

【Nコード】

N4079Z

【作者名】

鈴一

【あらすじ】

貴族の青年、ナイアーツは留学していた友国から3年ぶりに祖国へ帰還する。

本来なら王都で大貴族の時期当主として励むはずが、とある理由から小さな町の領主となったナイアーツ。

その町は都会人から見れば辺境と言ってもいい場所で。

王都から離れた小さな町の日常、そして時々
の非日常。
少々変わっているが心優しい青年と町民の、
物語。

ほのぼの、ときどきシリアスなお話です。
前半はシリアスに傾いてますが、進んでいくにつれほのぼのになる予定。

天才的な能力をもっていますがイメージは優秀とか秀才という言葉が合う感じの主人公。
まったり更新です。

1：森の中の貴族（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

最初はシリアス気味ですがのちにほのぼの系になる予定です。

1：森の中の貴族

深い森だ。

時刻は昼にさしかかった程度だろうか、真上にある太陽がその恵みの光を惜しげなく降り注ぎ、緑色の葉を風にゆらす木々は生命にあふれている。

深い森だといっても決して暗い雰囲気はない。それどころか家族連れのピクニックにちょうど良い場所だろう。

その森には街道が通っている。といっても王都から離れた地方なので綺麗に舗装されているわけではなくただ単に「道」があるだけだ。それでもその先に人の住む場所があるとわかるだけいいだろう。もっとひどいところに行けば獣道と変わらない。

石畳ではない、地面を整えただけの道を馬車が三台行く。

いや、厳密に言うとな馬車ではない。ゆったりと歩を進めているのは地竜、つまりこれは竜車だ。

今はゆっくりと進んでいるが、最高速度、力や知能等どれをとっても馬を上回る。

調教は飛竜などに比べ断然たやすいがもともと個体数がそれほど多くない亜竜種である。

身分の高い　つまり王族や上位貴族くらいしか使用しない竜車がなぜ、こんな場所に。

道行く商人や旅人がみたらそう疑問に思っただろう。

関わり合いにならぬようにしたり、逆に近寄ってきたり。

すこし前まで走っていた街付近の街道ではそういう反応だった。だがここではそんなことはない。

なぜならまず、人が通らない。

先ほどから見ているものといったら小鳥や狐くらいだ。

「…うん。見事に何もないな。」

少し開けた竜車の窓から景色を見ていた青年は、若干感心すら滲ませて言った。

彩度の低いワインレッドの髪に、反するかのような水色の目が鮮やかだ。

顔立ちは凛々しく細微に整っており、気だるげに窓際に肘をかける姿でいても隠しきれない気品がある。

それもそうだろう、彼はこの国で大貴族と呼ばれる家系の出身なのだから。

大貴族エインハルトの青年 ナイアーツ・エインハルトはため息をひとつついて視線を室内に戻した。

その動作でさえ優美に見える。

ひとつひとつの動きは生まれながらの高貴さと教育されつくした気品に溢れていた。

「森がありますぜー、若。」

前方の小窓から、御者をしていた男が顔をのぞかせて言う。

年齢は30代半ば。

獅子のような金茶の髪に、そこか悪戯めいた同色の瞳がナイアーツをみていた。

かろつじて整えたと言っているいいアゴヒゲを撫でている。

「他には？」

「小川とか。」

「他には？」

「空気。」

「目に見えるものが欲しいのだな。」

「じゃあ俺の顔みといて下さいよ。」

茶化すように笑って言うその態度は主に対するものとは思えないが、青年は気にもとめず軽く肩を竦めて見せた。

「それこそ飽きたよ、グラン。」

主の言葉に男　グランディ・アルタはニヤニヤとした笑みを浮かべる。

「この男前を見飽きるとかそりやないですぜ。あ、じゃあちよっくら休憩します？ついでに数年ぶりに模擬戦でも。」

「お前相手に剣で模擬戦をしたら休憩にならないが。」

「暫く剣握ってなかったそうですね。これは俺が680勝目いたたきだな。」

「私はそんなに負けた覚えはないぞ。500対450といったところだろう。」

「そりやもちろん俺が500勝のほうですよね？」

「冗談だろう？」

「よーしじゃあ今勝負して…」

「グランディ。」

今にも竜車を止めそうな勢いのグランディを遮ったのは、妙に迫力の込められた男の声。

声の主は、唯一ナイアーツと共に車に乗りその警護をしている黒髪の男だ。

冷たい灰色の目でギンツとグランディを睨み付けると怒りを堪えるようにゆっくりと口を開く。

「危険からお守りするのが我らの役目だ。わざわざ危険なことをしようとするな。それに、ナイアーツ様にその様な口の聞き方を…即あらためろ。」

はつきり言つてグランディの態度はナイアーツが幼いころから変わらずでありもはや日常化しているが、同じく幼いころから身边警護しているこの専属の兵士は毎日の如くそれを正そうとする。

10年以上も前からである。

「相変わらず真面目だなー。眉間の皺ふえるぞ。」
あっけらかんとした言葉。

それに、レジス・サーマインの口角がひくりとひきつるのを隣にいたナイアーツは見た。

「こ、の、大馬鹿野者！一体貴様はいつになったら学習するんだ！」
いまにも立ちそうな勢いで怒るレジスにグランディはへらへらかわしている。

「若がいいつて言ってるからいいじゃん。」

「まあ、公の場で使わなければ構わない。」

「ナイアーツ様！」

「あまり暴れるなレジス。車の中だ。」

「う…も…申し訳ございません…」

しよばーんとするレジスをみて、ナイアーツは内心「犬に似てる」
と思ったが言葉にはしないでおく。

「…ところで若、もうひとりくらい警護入れたかったんですけどねえ」

と、話の流れを切ってグランディが言う。

怒られていた者の態度ではない。レジスの眉間の皺がまた寄った。
反省はしてないだろうが、公の場などではむしろ完璧な態度をとるので問題はないとわかっている。

ナイアーツは苦笑してグランディを見やった。

「お前のことだから、女性を入れたいのだろう。女性を。」

「さっすが若！長旅で男ばかりじゃ嫌ですよ。後ろの車を守ってるやつらも全員男つしょ？潤いが！潤いが欲しい！」

後ろの竜車はほとんど人は乗っていない。必要な荷物と、御者、荷物を守る役目やナイアーツの世話をする者が数人いるだけだ。

とても貴族の連れとは思えない人数。グランディの発言に怒鳴りつけようとしたレジスを制する。

「遠回しにふざけていわなくとも言いたいことはわかるが。…いやまあお前のそれは半分本気だろうがな。共が少ないのは…仕方がないだろう？ お前とレジスを連れてこれただけでもいいほうだ。あまり屋敷から実力と信頼があるものを引き抜いていくのは不味い。…私はもうあそこには戻らないのだから。」

ぼつり、と付け足した言葉にレジスは怒りを消して沈痛な面持ちで押し黙る。

「選んでいただき光栄ですよ。」

逆に朗らかに笑ってみせたグランディだが、その目は怒りに満ちていた。

ナイアーツではなく、レジスにでもない。

その怒りの先を知っているナイアーツは苦笑を深めた。

彼は、再び外を見る。

相変わらずのうらかな陽気。

木々の間から見える青空を眺めながら、ことの始まりを思い返していた。

2：帰国の日

その日、友国である学術国家ルセネへ留学していたナイアーツは3年ぶりに祖国へと帰還した。

精霊の国アルトラクス。

大陸内でも大国に入るこの国は古きより精霊とのかかわりが大きい。初代国王の後は精霊であり、昔は国民のなかでも人の世にくだった精霊と結ばれる者が多くいた。

王が死んだ後、その後だった精霊はしばらく子孫たちを見守ったが、やがて何処かへ消えたという。

他の人の世にくだった精霊たちもいつしかいなくなり、いまでは肉体を得て現れる精霊はほとんど居ないといっている。

それでもこの国には、いや世界には様々な精霊が満ち溢れているのだ。

アルトラクスには精霊の血を継ぐ人々が残った。

それらはその血ゆえ高い魔力と寿命をもっている。

今はその血もだいぶ薄れ寿命に関しては見た目が若々しく平均より多少長生きという程度となっているが、王家や上流貴族の一部ではまだ色濃く残っている。

そのため歴代の王は長寿だ。

今の王はまだ40代。この先何十年も治世は続くだろう。

もしくは途中でその息子に譲るか、だ。

幼馴染でもある第一王子を思い浮かべて、ナイアーツは苦笑した。留学中も頻繁に手紙をやりとりしていたが、「暇だからはやくかえって来い」の一点張り。

帰ってきたとなると明日あたりには顔をみせなければ盛大にすねるだろう。

同じ22歳のはずだがあれは少し子供っぽい純粋なところがある。

子供っぽいといっても悪戯ばかりのガキ大将ではあるが。
港から王都へと入ると、護衛が家の者に引き継がれる。

竜車を降りたナイアーツは久々の王都に懐かしさを感じるとともに、何か違和感を感じた。

（…なんだろう。なにか胸騒ぎがする。）

きつと、長旅で疲れて神経質になっているのだ。

そう思った彼だが、3年ぶりに顔を見せた護衛のレジスを そのどこか緊張した顔見て不安な予感がただの勘違いではないと確信した。整えられた黒髪に、銀色の鎧がよく似合う彼は主の前に跪くとナイアーツの許しを得て立ち上がる。

「お久しゅうございます。ナイアーツ様。」

「ああ、お前も変わらないようにで安心した、レジス。…さて、前置きはいい。何があった？」

表情は緩やかなまま変わらず周りに聞こえないよう声を低めて訪ねれば、レジスがより表情を緊張させ言った。

「…申し訳ございません。ここでは…早急にお屋敷にお送りいたします。」

頷いてみせると、即座に部下に命令を飛ばすレジス。
目立たぬよう最小限でありながら腕の立つものをつれてきているらしい。

エルンハルト家の長男の護衛だ。腕の立つ護衛をつれてくるのは当たり前だが、何故こんなに少人数できたのだろう。
目立ちたくないというように。

「…やれ、帰って早々ともないことになりそうだ。」
乗り換えた竜車のなかでナイアーツはゆっくりと目を閉じ、屋敷につくまで言葉を発することはなかった。

「よく帰ってきた。ナイアーツ。立派になったものだ。」

「お久しぶりでございます父上。父上もお変わりないようで安心致しました。それにたった3年です、私はそう変わってはおりませんよ。」

屋敷に帰るなり玄関で出迎えた父、エインハルト公爵は厳格そうな顔を少し緩ませた。だがその眼にうかぶ緊張をナイアーツは見逃さなかった。

内心事態の大きさを感じながら、微笑を浮かべて対応する。

「そう硬い話し方をするな。いつも通りでいい。」

「わかりました父上。それで。」

「…ああ、わかつている。書斎のほうへ。」

「お前も、すでに何か察していると思うが。事件が起きた。」

父の書斎に通され、給仕が紅茶を用意し終わったのを見計らって重々しく口が開かれる。

「ええ、ただし市民には知られていないか、貴族内の事件ですね。

街の様子は普段と変わらぬようでした。」

「ああ、市民には知られていない。…だがいずれ知らされる、いや知れ渡ってしまうだろう。」

エインハルトの現当主は、一度紅茶で唇を湿らせるとナイアーツを見据えて言った。

「……第一王子に…リュカシア殿下に毒が盛られた。」

声にするのも恐ろしい、というようにひそめられた言葉をきいて、青年は耳を疑った。

無意識に息をのむ。

今、父はなんと言った？

「そんな…まさか…リュカに？」

声がかすかに震えているのが自分でもわかった。その心のどこかで

「ああ、こんなにも取り乱したのは久々だ。」と、もう一人の自分が冷静にみている。

「慌てるな。幸い一命は取り留めた。だが当分は安心できないだろう。」

「そうですか…。」

肩の力が抜け、安堵の息をつく。

つい数日前にこれから帰国するという手紙を出したばかりだった。もちろん返事はもらっていない。それが最後の手紙になっていたらと思うと恐怖と犯人に対する怒りがこみ上げてくる。

「父上…。教えてください。犯人は何者ですか。」

彼には父がわざと犯人の正体を後回しにしているように思えた。まだ不明などではなく、すでに判明していて言わずにいるのだと。事実父は、眉根を寄せ言葉を濁らせた。

「…落ち着いて聞け。…今回は個人のもではなく。ある貴族の一族ぐるみで行われた。すでに全員捕らえられている。」

「そうですね。リュカは第一王子。暗殺するのは並たやすいものではない、組織的な集団、それも内部の犯行か内通者がいると考えていいでしょうから。」

命に別状はなく、犯人も捕らえられたと聞いてひとまず安心だろう。本当に犯人が全員捕まったとわかるまで油断はできないが。

そう巡っていた思考は、父の次の一言で凍りついた。

「その一族は…サーズニル。そう、亡き妻…お前の母の一族だ。」

3：罪の一族

サーズニル。

古い歴史をもち、王家同様精霊の血を濃くひく貴族の家系。

優秀な魔術の使い手を多く輩出していた家ではあるが、貴族としては中流。決してそれより上にいくことはない。

なぜなら300年ほど前一族の一部が王に反旗を翻したのだ。己のもった魔術の力を過信し、傲慢になった結果だった。

関わっていないわずかな人数を残し、全員処刑された。

それ以降彼らには裏切りの一族といわれ続けていたのだ。

今、一般市民でそれを知っているものはほとんどいないだろう。

だが彼らより長寿である王家や貴族にとってそれは決して遙か昔のことではない。

今でも一部の貴族には嫌悪されており、そのほかも上流貴族は特に悪意に付き合おうと思うものは少ない。

母はその一族の直系だった。

すばらしい魔力と、精霊に愛される優しい心を持った女性であった。ナイアーツが10歳のころに亡くなったが、母の笑顔を忘れたことはない。

父と母の結婚は周囲の誰もが考えなかった。

王と他の貴族に嫌われる一族。

対して父は出会ったころハーウェン・エインハルトではなく、ハーウェン・アルトラクス……この国の王の血筋を名乗っていた。

現国王は父と2歳違いの兄である。

ナイアーツにとって国王は伯父にあたり、リュカリアは従兄弟となる。

夜会でであった二人はお互いに一目惚れし、周囲に隠れて交際。結婚を発表したときは猛反対を食らったという。

王家と、かつて王を裏切った一族の結婚を反対するのも当然だった。たとえ本人がどんなに良い人物でも、それだけでは許されないのが貴族の世界だ。

父は王位継承権を放棄、父と王の良き相談相手であった当時のエインハルト家当主の養子となることを宣言した。

大貴族であるが高齢で跡継ぎがいなかったナインハルト当主とその奥方は喜んで父を養子にし、父が結婚すると同時にその家督を譲り今は別荘で隠居生活をしている。

母以外の、サーズニル家の一部の人間はこれを機にまた上とのぼりつめるつもりだったのだろう。

だが結局、先代の王が彼らを特別に扱うことはなかった。

持病のため先王が現王に王位を譲っても、現王も彼らを無下に扱うこともなければ特別取り上げることなかった。

現王はまわりと同じように、等しく彼らの一族を扱った。

それを、彼らは許せなかったらしい。

もともとプライドの高い一族であり、一族の娘が継承権を放棄したとはいえ王の血を引く男子と婚姻したのだ。

重臣として取り上げられる、またはチャンスを与えられるのを期待していたのだろう。

ないがしろにされたのだと、彼らは今捕まった彼らは全て自供したという。

遙か昔からの不満、それがその出来事で爆発し今日この日に―王家への復讐を。

「『平等』に扱われたから復讐を？遙か昔許された恩を仇で返す、そして平等に扱おうとした現王の優しさを踏みにじる行為ではありませんか！」

話を聞き終わったナイアーツは、内心の苛立ちを言葉にして怒りをあらわにした。

滅多に声を荒立てない息子のその様子を、よく似た水色の目で見ていたハーウエンは苦渋に満ちたため息をついた。

ハーウエンは40代といっても元王家の彼は精霊の血が濃く、20代後半ほどの外見だ。

ナイアーツと並ぶと親子というより兄弟だと思われるだろう。

だがその父も、この事件に相当まいっているのか一気に老けたように見えた。

「今回は一族全員が…といっても、もともと人数も少ないが…一族ぐるみの犯行であつたようだ。直接関わった者は死罪、犯行を知っていた者も国外追放だ。一族全体として何らかの罰を受けるだろう。もつとも犯行を知らなかったのは幼子ぐらいなものようだが…。」
そして、と彼は続ける。

「立ち位置としてはエインハルトの一族となつているが…サーズニルの血を継いでいるお前にも、疑いがかかっている。」

「確かに、帰国した日にこの事件とは…ある程度疑われても仕方ありませんね。」

「ことが起こつたのは数時間前…今朝だ。まだお前は国境にも入っていない。直接的な関与は疑われないだろう。もちろん兄…陛下もお前が関わっているはずがないと否定されていらっしやる。」

なるほど、ほとんどはまわりの貴族が言っているのか。

予想通りすぎる事態にナイアーツは苦笑を浮かべた。

進言する貴族の中で本当に王や王子を案じているものはどれほどいるのだろう。

少しでも他家の力をそごうとする醜い争いにうんざりとした気分になる。

「一族の罪は血の罪。私だけこのままでいられるということはないでしょうね。直接どうこうはされなくとも、何らかの影響があるは

ずです。」

いつそ楽な口調で話し出した息子に、父はゆるく首を振った。

「今は荒立っているだけだ、お前が当主になるころには…文句はいわせない。」

「…いえ、父上。この機会にお話したいことがあります。」

わずかな、ほんのわずかなためらいにも似た沈黙のあと、青年は切り出した。

「私は、当主になるつもりはありません。」

「な…っ！」

ハーウエンは一瞬絶句すると、次の瞬間には慌てて身を乗り出す。ガタンとテーブルがゆれ、僅かに紅茶が零れた。

「馬鹿なことを言うな、なぜそうする必要がある？」

「今回のことはただのきっかけです、父上。確かにこれが必要ならば私は当主になっていたかもしれませんが。任命されれば断るつもりもありませんでした。ですが内心想っていたのです。私よりも弟のほうが、ふさわしいと。」

弟といっても血は半分しか繋がっていない。再婚した義母の子供だ。義母は母の親友でもあった女性で、母を失って消沈する父を支えているうちに愛が芽生えたらしい。

ナイアーツは弟を可愛がっているし、小さなころから知っている義母も慕っている。

「弟は…クルーセルは未だ幼いですが聡明で、優しい子です。それに義母上はわずかですがエインハルトの血を引いていらつしやる。その子であるクルーセルも同様です。まったく血の引いていない私より適任でしょう。」

「それは…そうだが…だが、お前はとうするつもりだ？クルーセルの補佐になるのか。それともエインハルト領のどこかで監督に

おさまるのか。」

「そうですね、そうできればと考えております。」

やんわりと言い切ったナイアーツを数秒見つめ、公爵は乗り出していた身をソファアーに沈めた。

そして長いため息をつく。

「まさかこのようなことになるとは…。」

「人生はわからないものですから。」

「お前は少し達観しすぎていないか？もう少し若者らしい考えをもつてもいいのだが…。」

「父上のような大恋愛でもしたいところですね。」

「…だが、その出会いがなければ、今回の事件もなかったかもしれないと思うと、申し訳ない気持ちになってくるな…。」

公爵の苦笑したその表情はナイアーツに良く似ている。

「私は感謝していますよ父上。母上と出会っていただけたことでこうして私はここにいますのですから。」

やわらかく微笑した息子に亡き妻が重なって見え、ハーウェンはわずかに目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4079z/>

ヒルテンリートの鐘が鳴る

2011年12月20日15時48分発行